# 部落問題文芸・作品選集

第三七巻

田中桃葉著

村長

世界文庫版

部落問題文芸作品選集　第三十七巻

昭和五十二年二月二十五日発行

発行者　松本富夫

発行所　株式会社世界文庫

東京都目黒区洗足二―一二―一五〒152

電話〇三（七一六）六一五一（代表）

（七一三）九二四四

振替　東京　四―七八四九八番

定価は箱帯に表示

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

# 序

今の世の自然派の小説も、一種の小説也。されど、自然派の小説にあらずんば小説に非ずと云ふに至つては、われ與みせず。

桃葉の『村長』は、今の所謂自然派小説にはあらざるべし。その主人公、笹岡辰雄は、今の自然派の目して、道德に囚れたる人となす所なるべし。辰雄は文學士にして、高等師範學校の教員也。その鄉里のいたく衰へて、自治の實を擧ぐる能はざるを見て、其職を棄てゝ、村長となれり。あらゆる故障と鬪へり。妻の虛榮心とも鬪へり。終に妻に見棄てられたり。一般に忌み嫌へる穢多の女と婚せり。穢多をして聖代の恩波に浴せしめたり。いろ〳〵村の發達を圖りて、終に其目的を達したり。仁者といふべき哉。

辰雄の如きは、醇化したる自然の人也。これが道德に囚はれたるもるなら

ば、自然派の人物は、野性にして、自然に囚はれたるもの也。囚はるゝことは、一也。自然と云ひ、不自然と云ひ、眞と云ひ、僞といふも、竟に見る人の高下によりて決す、動物に眞にして、人間に僞なることあり。人間に眞にして、動物に僞なることあり。野性にして、人間よりは、動物に近き人達に人生の眞相がわかるべき筈のものに非ず。其虛僞といふは、豈に眞の虛僞ならむや。

日本は　むかしより君子國と云はる。醇化したる國民なれば也。今の自然派小說の如きは、新しきものを珍らしがる一種の流行に過ぎず。さは云へ、世に識者は多からず。修養の未だ足らざるものは、やゝもすれば、うきたる流行に誤られむとす。余は斷言す、この小說の如きものが歡迎せらるゝ間は我國民は、未だ墮落せざる也。

明治四十一年七月

大町桂月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

教育小説

# 模範村長

田中桃葉著

## (一)

土佐は山國。其山國の中でも別て山村と云はれた吉川村は、波濤の如く天際にそそり立つ土豫山脈の谿間を天地にして、夏は笹ケ峯の翠嶺を北に望み、冬は白髪山の雪を西に仰ぐ所に、吉野川の流を中に挾むで、南岸に葛野、谷山の二部落。北岸に上の瀬、赤石、一の瀬の三部落を連ねた、戸數四百、人口二千四百の一村を作つて居る。退に酒屋へ三里、豆腐屋へ二里と云ふ程の不便はないが、國家未曾有の大發展をしたと云ふ明治△△年の今日でも、荷車を通ずる一筋の道路もない。寒村である。

時は四月二十三日の朝。今日の快晴を豫報する朝靄は、何時よりも濃く立罩めたので、摺鉢の底に似た吉川村の小天地は混沌として、其底から瀨に碎ける流の音と、鷄犬の聲とが沈むだ狀に聞えて居たが、其時刻も既に午前八時頃になると、靄の幕は空の方より薄くなつて、中天には微に藍の色を顯した。烏越坂の上に登つた太陽は、銀塊の狀に大くどんよりとして居たが、次第に金色の光が出來ると共に、靄の幕には處々に割け目が出來て、彼方此方の天際には、樅杉の木立の見える尖つた峯の端が見えだした。

同時に活力を持つた春の風が出たので、靄の幕は忽ち寸斷せられて。麥畑、桑畑蕨、薇の簇つた南岸の山の麓が露れる。其の麓に飛々の炊煙ゆるぎ谷山の人家が露れる、葛野の入口の人家が露れる。谷山の下になつた渡頭の上の村役場の前から烏越の方に通じた蛇のうねる狀な小徑を登つて行く二人の人影も露れる。眼下には、兩岸に淡竹の茂つた吉野川の河身が露れる。と、見るや、紫色に染つた靄の一片を

船綱に絡めながら、一の瀬の方から出た渡船は、中流で華やかな日の光を受けて、船も、乘つて居る馱馬も、馬子も、舳で繩を手繰つて居た農夫も、濱と金色に輝いたのを、北岸から眼も放たずに見て居る紳士がある。一の瀬も渡頭に近い、山間には珍らしい塗塀を廻らして衝木門とした、古風な玄關の付いた大きな家敷の庭前に佇むで居る。年齒の頃は三十前後。肉色のフランネルの寢衣の上に琉球飛白の綿入羽織を引掛け、背の高い、屹と肩の張つた、胸隔の寬榕な、頭の地の見える迄に頭髮を短く刈つた長方形な顏に、鐵縁の近眼鏡を掛けて、八字髭を生して居る。

紳士は茲の主人で姓を笹岡、名を辰雄と云つて、今年は三十二歳、敎育學專攻の文學士で、東京高等師範學校の敎授であつたが、本年の一月から腦を病むで、三月の中頃から快くなつたので、妻を伴ひ、山村の春は少しく櫻に早き四月の初旬に、病後の身體を養ふべく、さてこそ歸省して居るのである。

辰雄は變化を續けて居る朝の景色から未に眼を放さない。件の渡船は前岸に着い

た。斷片の靄も何時しか消えた。空は朗々となると、瀬の音も高まつて、鷄犬の聲も勇しく聞えだした。斯して春は今日も吉川村に滿たのである。

『辰雄。心地は何うぢやの』

と云つた者があるので、辰雄は我に返つて顧た。今しも門を這入つて來たらしい、六十前後で頭の禿た、眉毛が雪の狀な、眦も口元も力なく垂れて居るけれども、昔氣質の利かぬ氣は何所となく露れて居る老人だ。手織木綿の短い、胸紐を紙捩にした羽織を着、紬のべた〳〵した袴を着けて、素足に藁草履を穿いて居る。

（二）

其れと見た辰雄は、

『や、叔父樣ですか、これは好く被入いました、お蔭で私は薩張したのです。さア何うかお上り下さい』。と手を取らんばかりに優しく云つた。

『今日は役場へ行く傳手があつたきに寄つたが、無駄口たゝいてる間はない。』

と輕く頭を振つて、日の光を浴びた兩眼を眩ゆ相にした老人は、名を利右衛門と云つて、辰雄が亡父の弟で、上の瀬に別家して居るが辰雄の父母は、辰雄が未だ熊本の高等學校に居る内に、前後して死亡したので、以後辰雄の家の家政と五町に近い耕地と、七八町の山林とを保管して居る叔父である。

辰雄は利右衛門の方に向つて歩いた。

『其れでも一喫なされる位は構はないでせう』。

『其れや構はないが』、

と云つた利右衛門は、さて何うしたものであらうと云ふ樣な狀をするので、

『ちや馬渡でもお上りなさい』。

と云つて置いて、玄館の方に向つて、

『綾、叔父樣が被入しやつたせ』。

と知らすると、早速内から、

『おや叔父様ですつて』、

と應じながら、靜に玄館の障子を啓けたのは、細筋な長い頭髪を庇髪にした、色の蒼い迄に白い女だ。華車な、打見には二十歳か一かに見える、全躰か痩軀な上に、鼻筋の通つた鼻が高すぎる位に高いので、到つて傲慢に見えるが、睫毛の長い水々した眼元と堅く磨かと締つた口元とには、才に長けて居る事を露して居る。辰雄の細君の綾子である。綾子は打見より二歳上で、今歳は二十三歳である。綾子は閑雅に會釋して、

『好く被入いました。さア何うかお上りくださいまし』。

と云ふ尾に付いて、辰雄が復、

『鳥渡でもお上り下さい』。と薦める。

『そんなら一喫して行かうかナ』、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

と利右衛門は玄館の方へ行くので、辰雄も從つた。利右衛門が玄館先で、整へて草履を拔がうと俯向いた時、綾子の姿はフイと消えたが驚て二人が玄館の四疊半へ座を構へると、綾子は煙草盆を持つて出て來た。利右衛門は早速羽織の下から胴亂を取出して、竹の筒に入れてあつた煙管に煙草を詰めて一喫しながら、綾子に向つて、

『辰雄は生れ故郷だから左樣もあるまいがお前樣は最う厭になつたらうヲ』と云つて火を點けて一喫する。

『否當方に居る方が、如何に氣が寛裕して氣樂なか分明りませんわ。何だか苦勞を忘れた狀で御座いますの。其に川が綺麗ですし、山には種々な花が咲きますし、眞箇に此樣好い所は他に澤山ありはしないですよ』、

と上調子に云つた綾子のお世辭を聞いて利右衛門は何う思つたのか、力を籠めて、吹殼を丁と叩いて、

『お前樣等の目には、左樣見えるか知らないが、此村程詰らない村は、他にはないだらう。村稅を滯納する者が二百餘もあると云ふ貧乏村の上に、人の精神が腐つて了うて、詐僞を爲たり、竊盜を爲たり、賭博を打つたり。其れやいろ〳〵な事をする者が出來た。此家は昔からの里正で、私の父親の代迄は里正をしてたから、私も見て知つてるが、其時には、其樣事をする者は千人に一人か二人しかなかつたが、今ぢやア千人が九百九十人迄、其樣事を爲出したのだ。其れで最う此村も、御運の末かと思つてたが、昨年から赤石の柳川樣が村長になつて下さつて、必死と村の爲を爲て下さつたので、是で此村も、持ち直すぢやらうと娛むでたに、此樣事になつたからは、又此村は暗闇ぢや』、と慨歎した利右衞門は、本村の村會議員である。

綾子は返辭に困つて無言。辰雄が口を切つた。

『柳川樣の後任は在りましたか』、

（三）

柳川様の言葉に、二喫目の煙草を詰めやうとした手を控へた利右衛門は、眉を顰めて、

『左様さ、其事だて、何うも是と云ふ人が無いで困つてる。今日は其れで村會を開くが、此村にないとすれば、他からでも雇はねばならないが、成るべくは村の人に爲たいものだ。其れでなくてさへ笑物に爲られて居る村が、又笑はれては耻の上塗ぢや』、と又しても慨歎。

『其れぢや心當の人もないのですか』、

と云つた辰雄は、叔父の憂を別つた顔色であるが、綾子は不關焉として、右手の紅差指に挿た寶石入の指環を弄つて居る。利右衛門は煙草を詰めて火を點けながら

『何心當は、二人ばかりあるにはあるが、一人は葛野の男で、年中人の公事を買

ふて裁判所に行く性質の惡い男だし、一人はれ前も知つてる赤石の山崎だが、彼奴は詐僞見たやうな事をする男だから、村の爲にはならないだろうと、皆の奴が困つてる。昨日も助役の太田樣が、里正の息子なら願ふてもない事だが、これは何うも相談にならないんだろふと笑つてた。これは外でないお前の事だよ、私も左樣〳〵彼が稅務吏かなんか爲てるなら、叔父の權理で辭職させて、是非村長にすると云つたが子、これには己れも困つたヨ。

『私で拵はなけれや叔父樣。村長になりませう』。

と決然として云つた言葉には生氣があつたが、利右衞門は串戲にして、

『ウム、村が金持になつて、村長の月給が百圓位になつたら、歸つて來て村長になつてくれ。目下の所ぢやア九圓五十錢から上は一厘も出ないからナハッハッハッハ〻〻と笑つた。

『ホ〻〻』と綾子も笑つた。

辰雄は靜に髭を撚つて。

『叔父樣。私は串戲ぢやないのですよ、眞箇ですよ』、

『左樣か、眞箇なら九圓五十錢で遣つて見る氣か』、と利右衞門は笑つて居る。

『遣りますとも、九圓が八圓でも、假令、一圓でも五十錢でも構はないです。叔父樣なんかは村長の職の尊い事を知らないから其樣事を被仰るのですが、實は村長の職は尊い物です。私は兼て思つて居た事も在りますし、其れに先祖から世話になつて居る村の事でも在りますし、私で構はなければ村長にして戴きたいものですが、何うでせうね、

と辰雄は益〻熱心の色を深くして、最早一場の座談でない狀が分明つたので、利右衞門は妙な顏をした。綾子も其睫毛の長い水々した眼を睜つた。辰雄は話を續けた。

『今日私も、叔父樣と一所に役場へ行つて自分から相談して見ませうか』、

『相談しないでも、お前が村長になると云へば、一も二もない事だが、東京の方は何うする』。と利右衛門は當惑して居る。

『止めて了ひます』。

『止めると云つた所で、其樣事が出來るものか、なるほどお前は、生れた在所だし、其れに月給が九圓五十錢でも、食ふに不自由はない家だから、れ前一人なら奇好に遣つても好いが、綾樣には兎ても辛抱が出來るものじやない、左樣だらう綾樣』。と利右衛門は綾子に加勢を請ふて、共に辰雄の決心を翻さうとした。

『否叔父樣。妾の辛抱は出來るに致しましても、此樣立派な身體になつて居て、田舍に燻るのは惜いではありませんか』、と綾子は利右衛門に依らうとする。

利右衛門は大賛成。

『左樣とも左樣とも、村長なんかするなら、大學校へまで這入らいでも好かつた』。と說破一番。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.